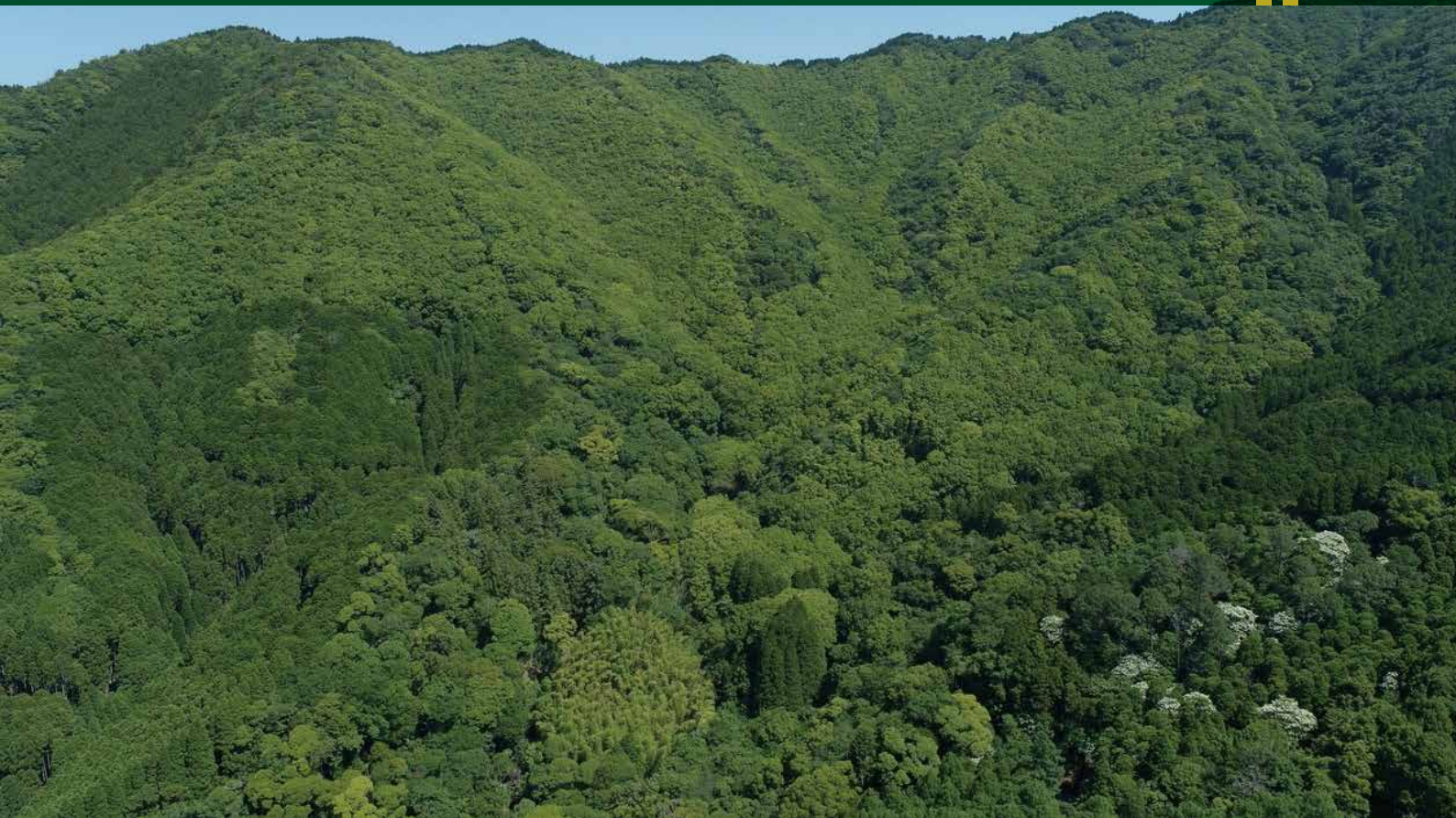




クスノキの人工林

日本の化学産業を支えた クスノキの人工林

東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林樹芸研究所

齋藤暖生

樹芸研究所と クスノキの人工林

樹芸研究所は東京大学の演習林の一つで、伊豆半島の南端の静岡県南伊豆町にあります。ここに約48haにもおよぶ、まとまった面積のクスノキの人工林があり、「東京大学樹芸研究所 岩樟園クスノキ林」として林業遺産に認定されています。

このクスノキの人工林は、渡辺平四郎という人物によって、樟脳生産^{しょうのう}を目的として植栽されました。渡辺は、現在の松崎町岩科(旧・岩科村)の出身で、岩科村の村長を務めたほか、「伊豆の鉱山王」の異名を持つ実業家でした。明治41(1908)年、渡辺は現在の南伊豆町青野の奥山に原野を購入し、人夫を住ませ、クスノキの植栽と樟脳生産に着手しました。渡辺は、この山林を岩科村の「岩、クスノキの漢字「樟」とって、「岩樟園」と名付けました(松崎町2001)。

植林をして間もない明治42(1909)年、大雨による土砂崩れをきっかけに、金

銅鉱が見つかりました。そこで、渡辺は鉱山経営に乗り出しました。この鉱山では、多くの労働者と牛馬が働いたとされています(松崎町2001)。樹芸研究所に伝わる1910年代に撮影されたとされる岩樟園の写真を見ると、若い植林地を背景に、二つの石塔が見えます。この石塔は、鉱夫一同によって大正2(1913)年に設置されたものです。

鉱山の経営は順調であったようですが、大正3(1914)年に大手の鉱山会社に譲渡されます。さらにその後、岩樟園を含む周辺の山林は東京帝国大学によって購入され、昭和18(1943)年に樹芸研究所が設



渡辺平四郎の肖像(国指定重要文化財岩科科学校蔵)

クスノキと樟脳生産

クスノキ人工林のいま

```

graph TD
    A[クスノキ] --> B[樟脳原油]
    A --> C[粗製樟脳]
    B --> D[ピンチ]
    B --> E[藍油]
    B --> F[赤油]
    B --> G[白油]
    B --> H[再製樟脳]
    B --> I[精製樟脳]
    D -.-> D1[電気絶縁用]
    D -.-> D2[船舶甲板充換用]
    E --> E1[クスノール]
    E --> E2[セスキカルベン]
    E1 --> E1a[医薬]
    E2 --> E2a[香料・保臭剤]
    F --> F1[サフロール板]
    F --> F2[抱水テルピン]
    F --> F3[サフロール]
    F --> F4[サフワラス油]
    F --> F5[人工]
    F1 --> F1a[染料]
    F2 --> F2a[香料・医薬]
    F3 --> F3a[ワットロビ・ワニリン原料]
    F4 --> F4a[香料]
    F5 --> F5a[香料]
    G --> G1[シネオール]
    G --> G2[人工香脂油]
    G --> G3[ナレピン油]
    G --> G4[人工エーカリ油]
    G1 --> G1a[香料・溶剤]
    G2 --> G2a[香料・溶剤]
    G3 --> G3a[香料・溶剤]
    G4 --> G4a[医薬香料]
    H --> H1[セルロイド原料]
    H --> H2[電脳原料]
    H --> H3[退鉛剤]
    H --> H4[DDB剤]
    I --> I1[防虫殺虫剤]
  
```

kg

3000000

2500000

2000000

1500000

1000000

500000

0

1900 1910 1920 1930 1940 1950 年

■ 粗製樟脳(kg) ■ 樟脳油(kg)

岩樟園でのクスノキ植林

樹芸研究所設立

クスノキ植林奨励政策

引用文献
専売文化事業協会（1950）樟脳読本、日
本専売公社
日本専売公社（1956）樟脳専売史、日本
専売公社
松崎町（2001）郷土の先覚者たち、松崎
町



13 2025.8 VOL.221 林野